

氏名（本籍）	イケダヨシト	池田嘉人（岡山県）
学位の種類	博士	（美術）
学位記番号	博美	第123号
学位授与年月日	平成16年	3月25日
学位論文等題目	作品 『Melting point』	論文 不可能な物語
論文等審査委員		
（主査）	東京芸術大学	助教授（美術学部） 保科豊巳
（論文第1副査）	千葉大学	教授（教育学部） 長田謙一
（作品第1副査）	東京芸術大学	“（美術学部） 櫃田伸也
（副査）	“	“（“） 佐藤一郎
（“）	“	“（“） 中林忠良
（“）	“	助教授（“） 中村政人

（論文内容の要旨）

本論文はコミュニケーションと記憶という二つのテーマを立脚点として、不可能な物語を見出すことを目的としている。不可能な物語とは、不可能性を前提とした「他者とのコミュニケーション」において実現する時間であり、経験であり、すなわち物語のことである。

本論文は以下の構成をとる。

<はじめに>では、これまでの活動経緯や制作動機に触れることにより本研究の始点を設け、その後論文全体の構成を概説する。

第一章<コミュニケーション>では、現在の社会状況を一瞥することによって、私が「他者とのコミュニケーション」ということを研究テーマとする必然性を論究する。具体的には、現代社会を「情報化」と「ポストモダン化」という二つの側面において考察することにより、現在のコミュニケーションの問題を明らかにする。

ここでは、「透明なコミュニケーション」と「事実性としてのコミュニケーション」という二つのコミュニケーション形態を見出し、いかにわれわれのコミュニケーションが固定的な「申し合わせ」をもち、制度化されているのかということについて、また本来の意味でのコミュニケーション、重要な概念となる「他者」について考察する。

第二章<記憶>では、私の作品制作におけるもう一つの重要なテーマである、記憶についての言語による表出である。最初に、記憶とコミュニケーションとの関係に着目することの契機となった、近親者のアルツハイマー疾患、死という私の個人的体験を述べ、いかに記憶というものが、

「他者とのコミュニケーション」において重要であるのかということについて触れる。その後、この極めて個人的な出来事を、まずその喪失体験についての考察を反芻、解釈し直すことによって、そして想起することによって、それが私にとって何だったのか、更には記憶とは何かということを見つめ直す。この体験以降、私の作品制作において記憶のあり方が決定的に重要なものとなる。

第三章<オーバーラップ>では、これまでの論述を踏まえ、具体的な三作品を論じる。ここでは、コミュニケーションと記憶の相互関係を顕在化するために、オーバーラップというものを共通した方法論として提示する。それは、単一的なコンテキストを普遍的な出来事へと転換する試みとして捉えられる。具体的には テキスト、想起、編集 という三つの概念によって表出される。

- ・ テキスト

「織られたもの」を語源とする テキスト を使うことによって、ともに語源を同じくするコンテキスト = 記憶に近づく。複数人の綴る テキスト をオーバーラップし、コミュニケーションを顕在化する。

- ・ 想起

会話やインタビューにより相手に 想起 させることによって、表象不可能な記憶に近づく。そこで見出されたものに、私が体験的に得た記録媒体をオーバーラップさせ、コミュニケーションを顕在化する。

- ・ 編集

個人の記憶という極めてプライベートで特殊なものを、編集 という作業を通して普遍化させる。私の記憶 = コンテキストを解体し、その解体されたものをオーバーラップさせることにより、他者と共有できるフィクショナルな時間を形成し、コミュニケーションを顕在化する。

終章 不可能な物語へ では、本論における経験、論究を踏まえて今後の作品の更なる深化、発展を示すことで締め括る。

以上のように、本論文はコミュニケーションと記憶をテーマとした私の作品論であり、研究、模索してきた軌跡であり、また作品そのものである。

添付する提出物

- ・ DVD 1 枚 作品 3 点収録（これまでの作品の写真、展示記録の資料付）